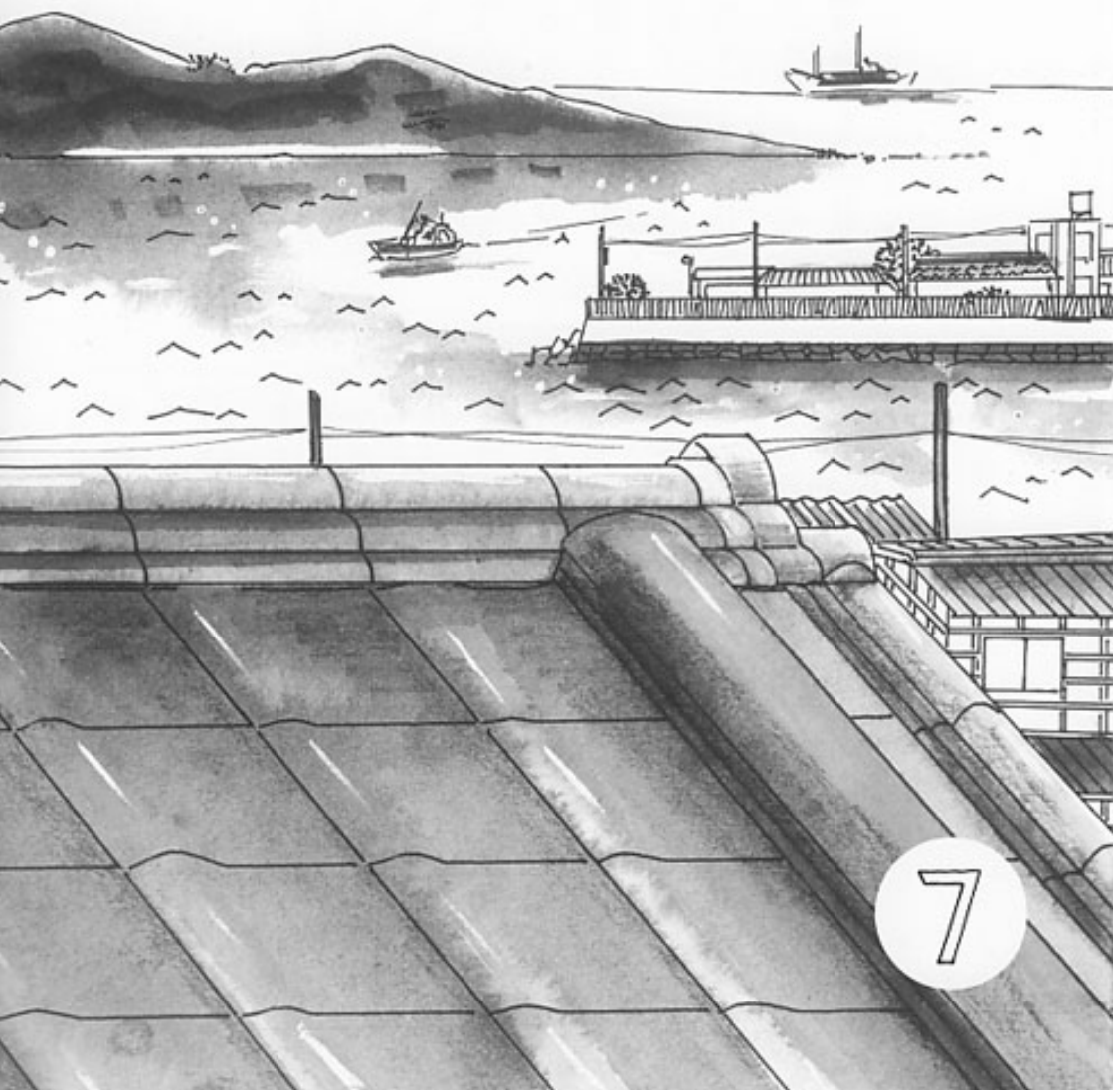


令和2年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻7月号(通巻732号)

風土



7

激雷の冷ますゆとうや傾けては

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

桂郎師の蕎麦好きは有名でした。並木の「藪そば」もそうですが、本店は神田の連雀町にあり、神田に用事があると必ず寄ったそうです。もちろんざる蕎麦に酒を堪能するわけです。ほろ酔いのあとには蕎麦湯が出て、それを飲むのも楽しみの一つです。この句の「ゆとう」は、蕎麦湯の入った漆塗りの容器です。折しも外は激しい雷雨です。「少し落ち着くまで蕎麦湯を冷ますか」、湯桶を傾けつつ待つところに食通の桂郎師の面目が表れています。

後手に小窓ひらけばよだち来ぬ

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

これは七畳小屋での一餽です。俳人協会刊の『石川桂郎集』の手塚美佐氏の註によると小屋の一番奥に文机があり、桂郎師はそこに座って仕事をしていました。その後ろにはにじり口のようなガラスの小窓があり、庭の青竹が見えていたそうです。先ほどから音がするので開けてみたら夕立ちが来ていたのです。

たらたらと即ひとつ火のいつかな

(句集『波の花』より平成十三年作)

「ひとつ火」は時宗の一遍上人が開いた、藤沢市にある通称遊行寺での宗教行事です。十一月十八日から二十八日まで行われますが、二十七日には全山の灯火を消し、火打石による採火がおこなわれます。これを「遊行のひとつ火」と言います。この句は暗闇に遊行上人の念仏が流れる中で、いま火打石で「ひとつ火」が点火されたところです。第一打は「見せ火」、二打で「点火」するのです。

千の瞳に一つ火一つづつ灯り

(句集『波の花』より平成十三年作)

俳人協会刊の『神威器集』の自註によれば、器師はこのように述べています。「点火された新しい火は、つぎつぎと仏前に灯され、暗闇の中の人々の瞳にあらたな光明の灯が点る。静かな上人の念仏が大合唱になり、人々の歓喜は最高潮になる。」

この二つの句は「ひとつ火」の宗教行事をモノに即した動きで描き、臨場感があり、器師の写生力が如何なく發揮されています。

修司の五月

南うみを

田の水に夜も組まるる花いかだ
花びらの貼りつくままの甲羅干し
田のひかり増えてつばくろ高々と
少女期の胸ゑんどうの花過る
白藤のひと揺れもせずたそがるる
桜の実かりり修司の五月来る
玉苗を待つまつさらな田水かな
次々と露の早苗の運ばるる
寸分も狂はず田植機苗を挿す
水に顔ぶつけて洗ふ柿若葉
網戸して村の田水のかんばしく
さみだれの田は活着を急ぎをり

竹間集

同人作品



方位計

浅田光代

みちのくへ空はつながら花辛夷
鬼瓦地に下ろされて養花天
泣いてゐる子が菜の花の真ん中に
うどん屋の裏口開いて雀の子
耕人のラジオの告げる正午かな
囀や切株に置く方位計
まん中に目玉集まるしやぼん玉

朧 夜

橋添やよひ

恋猫や祇園の路地を知り尽くす
朧夜の水車吐き出す水の嵩
畳まれて反るしかなかり紙風船
長期戦を覚悟の自粛新茶汲む
遣り過ごすしかなき疫や繭籠る
松の芯こぞり疫病寄せつけず
衰えぬえやみや雨の落ちひばり

仕事場

柿沼盟子

ぶらんこのひと日空かずに夕桜
雪よりも白の澄みたる山桜
秘密基地ひみつにあらず飛花落花
昼月を膨らませゆく花吹雪
トラックに古紙堆く飛花落花
食卓を仕事場として亀鳴けり
春疾風ベンチ無人の昼休み

余花残花

高村令子

もんどりを打つ児へ桜吹雪きけり
幼な児を送りて落花に阻まるる
春疾風抱きて離れぬ道祖神
相寄りて日蔭は淋し藪椿
覗き見の猫と目の合ふ花疲
野を焼いて山里闇を深めけり
余花残花うかと齡を重ねけり

ふたたびの

林 いづみ

剪定の枝積む丈もきつちりと
「乗り降り二両目より」てふ駅のどか
シャボン玉世界の果てのなかりけり
ポケベルに呼ばる診察目借時
今生にふたたび桜蔭隠しかな
二輪草ひとり静に押され気味
風変る五分咲き牡丹剪りにけり

春逝かす

土井三乙

遠き日に近づいてゆく春の夜
玻璃一枚隔てて深し春の闇
春昼の片隅にゐる欠伸かな
うららけし思ひ出せない葉の名
春深し四日剃らねば世捨人
師の遺されし「命二つ」や木の芽雨
一病に余命をあづけ春逝かす

鳥 帰る

小林 共代

半島を斜めに横切り鳥帰る
囀の中で頬ばる握り飯
鳥曇川がつなぎし安房上総
さらさらとゆるき流れや葦若葉
大原野一歩一歩に土匂ふ
業平の塩焼きし跡つくしんぼ
草の根のまだ柔らかき四月かな

薫風裡

中根 美保

春の芝踏めば足裏を押し返す
逃げ水へキックボードを蹴り進む
父と子に葉桜の空ありにけり
打ちやすき球返し合ふ薫風裡
鯉のぼり上げ休館の剣道場
掘り上げし筍をほめ土をほめ
金鱗の殊に和蘭獅子頭

陽 炎

内藤 静

石積んで「吾輩」の塚陽炎へる
蝶の紋千輻輪と思ひけり
杳として磬の齡や山ざくら
岩ごとに波しぶきけり花は葉に
おん臍のほとりを滑る甘茶かな
うぶすなと言ふも旅寝の遠蛙
躲しあふマスクとマスク初燕

百の道

間島あきら

蝮歩く百にそれぞれ百の道
「まだそこか」師のこゑ聞こゆ蝮の道
秘と詠ふ堅香子なぞへ溢れしめ
風に乗り大河をわたる飛花の雲
花降りりかつて筵を延べし庭
くり舟の舳に初夏の声立てり
闇深き蘇鉄の翳や初夏の昼

弥生尽

土井ゆう子

花束のリボンを解き三鬼の忌
水はただ流れゆくのみ紅椿
吐く息の一つ大きく弥生尽
水仙や食事制限相伴す
桃咲いて人にやさしくなる晩年
藪椿駆込み寺と聞きぬしが
ぶらんこや寺に双子のベビーカー

山河集

同人作品



南うみを選

鈴懸の幹の斑明かし春兆す
蓮鉢の水に映れり春の雲
くしやくしやに咲く角つこの八重椿
復路にて開ける景色山笑ふ
蠨螋の真中に何か守るもの

高橋まき子

オセアニア南十字や風涼し
ユウカリの山焼きつくしコアラ死す
夕涼や船上に聞く二胡の楽
春浅き聖堂に脱ぐ旅の帽
海のほか染むるものなし冬夕焼

島 玲子

春泥にゆつくり走る宅配便
青き踏むせせらぎに沿ひ雲に沿ひ
飴細工の羽根ちよんちよんと鳥帰る
整列を教はる園児鳥帰る

岡本 尚子

豊国神社

東風吹くや仏を刻む鉋屑
春光に絵本見る子の産毛かな
囀りのたまる障子の内に居り

岡 尚

秀吉の膝に遊びて雀の子
春疾風子象の硬き産毛かな
木屋町の図書館のカフェ春の雨
ふらここや往きと帰りの違ふ風
鳥帰る東京湾を斜交ひに
春の灯の歳時記重し全五巻
囀やひら飼ひの鶏飛び跳ねて
鈍色の大利根春日泛かばせて

上村 葉子

波のまにまに

浜 福恵

九十年を波のまにまに 貝楼かいやぐら
ふるさとや卒業を待つ父母がゐて
柳絮とぶ海軍橋は名を変へて
山に入る虎杖は木になろうほど
新緑の香に喧せをるや水を欲る
山寺に絶えぬ水音 墓の鳴く
一茎一花河骨池に咲き満ちて
手を打ってい蠨蛸呼び出す知己のごと

峠下ればどの道ゆくも浜大根
老松の陰ふかぶか 浦島草
コロナ禍の世や立ち並ぶ浦島草
廃校の松を 峙の 巢立鳥
残り鴨寄り合ふ八十八夜かな
峡の田の植え終りたり大月夜
田の水に山を映してつばくらめ
大浦に西の海道枇杷は実
惣兵衛枇杷を祖に毛深しや実も枝も
海道に 鱧釣日和展ごりぬ
母郷のごとやさし棟の花の下
朴咲くや山に向へば父の声

風土独語／南 うみを



かげろひを来て流鏑馬の弓しぼる

岡本 尚子

「陽炎」を向こうに見ての句はあるが、これはそこからやって来る世界です。まるで映画の一駒で、陽炎から蹄の音が近づき、馬上の武士が弓を弾き搾り、見事に的を射て駆け抜けていった。一瞬がスローモーションのように目に焼き付きます。

手に乗せて仏師のねずみ穀雨かな

奥田 茶々

この句は仏師の作った干支のねずみと「穀雨」の取り合わせです。仏師から頂いたねずみは、おそらく「甲子大黒」のねずみでしょう。また「穀雨」はあらゆる穀物に芽をもたらす豊穰の雨です。このねずみは五穀豊穰に祈りを込めた「甲子のねずみ」なのです。

山桜夜は山神の一人占め

上辻 蒼人

作者は吉野に近いところに住んでいます。当然この「山桜」は吉野の桜です。昼間と違い吉野の山の闇にまぎれた桜は吉野の山の神に抱かれるのです。自然と神の有り様を大きく捉えました。

大地揺する太棹の音花万朶

上村 葉子

この句の「太棹」から津軽三味線を想像します。花の宴の一駒でしょうか。太棹の音が「大地揺する」に東北人のエネルギーを感じます。

山腹の大島桜海を割る

高橋まき子

「大島桜」は伊豆七島に自生する白色の大形の花で、美しい桜です。おそらくこれは島の大島桜が一斉に咲き、山腹を帯状に白く染めている景色でしょう。水平線に浮かぶ「大島桜」の帯を大胆に「海を割る」と表現したのです。大きな景です。

夏近き雲流れゆくボンネット

六車 佳奈

この句は読んで見逃しそうな句ですが、なかなか巧みに作られています。「雲流れゆく」は実際の空の流れゆくと読んでもよいのですが、ぴかぴかに磨いた車のボンネットに映っていると読んだほうが味わいがあります。「夏近き雲」も晩春の雲の明るさと速さを伝えています。「ボンネット」の素材も新鮮です。

陽炎や音を目で追ふサーキット

田中 玉泉

カーレースが陽炎でぼんやりして、車がはつきり見えない状態で、目当ての車を目で追う観客の様子が捉えられています。何よりも「カーレース」と「陽炎」の取り合わせが新鮮です。

風土集



南うみを選

手に乗せて仏師のねずみ穀雨かな 東京 奥田 茶々

たましひを抜かるる花の懐に
ちりぢりの蝌蚪を飲み込む亀の口

反芻の牛の半眼たんぼぼ黄
桃摘花ビニール傘を逆さ吊り

三百歳枝垂桜の名ぞ「伏姫」 千葉 上村 葉子

大地揺する太棹の音花万朶
進級の帽子に象のアップリケ

思はざる桜隠しは音持たず
行く春やドクタイエロト通過中

夏近き雲流れゆくボンネット 高槻 六車 佳奈

おほぞらに跳ね返さるる燕かな
川渡るまるき風あり暮の春
しじみ汁する夫にも夢のあり
指伝ふかすかなふるへ紋白蝶

陽炎や音を目で追ふサーキット 相模原 田中 玉泉

園服で手を拭き並ぶ花まつり
休業の貼り紙飛ばす春疾風

種芋を植糸終へ眺む曇り空
春風へ髪を束ねて走りけり

乗つてすぐ鉄橋となり山桜 町田 松本 胡桃

噂やメレンゲの泡ピンと立ち
絡みつくタンゴのリズム春の夜

蝌蚪すくふ子の髪熱くなりけり
あれそれの多くなりけり蜷汁
釣舟の櫂たたまれて月朧 相模原 岡本 尚子

ペテルギウスの明るさもどる花のころ
採光は菜の花淀の小さきカフェ

燕来る溪の青空浪立たせ
初蝶の飛ぶほどに充つちからかな